法人化第３回　（通算第１０回 *Since 2007*）

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会

# 飼料用米多収日本一表彰式、

# 飼料用米普及のためのシンポジウム　2017

*http://www.j-fra.or.jp/*　　*sympo20170317@j-fra.or.jp*

２０１７年3月１７日（金）

主催　一般社団法人　日本飼料用米振興協会

後援　農林水産省

法人化第３回　（通算第１０回 Since 2007）

# 飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会

# 飼料用米多収日本一表彰式、
# 飼料用米普及のためのンポジウム　２０１７

総合司会　若狭　良治（理事・事務局長）


プログラム　2
開催のご案内／開催要領　3
第一部　シンポジウム　開会１１：００～１２：００（敬称略）
主催者挨拶　一般社団法人日本飼料用米振興協会　理事長　海老澤　惠子　6
連帯の挨拶　日本生活協同組合連合会　総合運営本部　政策企画部長　小熊　竹彦　7
活動報告　「飼料用米における生産コスト低減技術の研究について」
東京農業大学農学部　助教〈農学博士〉　有澤　岳　8
事例報告　「飼料用米の保管手段の低コスト化研究報告」
太陽工業株式会社・物流システムカンパニーマーケティング室　室長　西村　哲　１８
● 展示、試食、休憩（各自、自由行動）　１２：００～１２：５０
第二部　シンポジウム　開会　１２：５５～１３：４０
基調講演　「水田のフル活用（仮題）」
農林水産省政策統括官穀物課　課長　川合　豊彦　３２
基調講演　「飼料用米の利用推進について（仮題）」
農林水産省生産局畜産部飼料課　課長　富田　育稔　４７
◆ 休憩・会場設営　１３：４０～１３：５５
飼料用米多収日本一表彰事業　報告と表彰式　１３：５５～１４：５０
日本飼料用米振興協会と農林水産省の共同開催です。　５４
挨　拶　一般社団法人日本飼料用米振興協会　理事長　海老澤　惠子　５６
報　告　農林水産副大臣　磯崎　洋輔
表　彰　農林水産大臣賞、政策統括官賞、全国農業協同組合中央会会長賞、
全国農業協同組合連合会会長賞、協同組合日本飼料工業会会長賞、
日本農業新聞賞　表彰状、副賞（盾）を各組織より授与いたします。
受賞者　挨拶　㈲　平柳カントリー農産　代表取締役　我孫子　弘美
◆ 休憩・会場設営　１４：５０～１５：００
第三部　シンポジウム　１５：００～１７：００
特別講演　「飼料用米の生産から畜産への給与、製品の出荷作業」
株式会社秋川牧園　会長　秋川　実　６４
活動報告　「生協における飼料用米利用畜産物の供給活動」
株式会社パル・ミート（パルシステム生活協同組合連合会）取締役商品本部長　江川　淳　８２
研究報告　「飼料用米を利用したＳＧＳ生産と活用事例」
熊本県農業研究センター　畜産研究所　飼料研究室　室長　鶴田　勉　９３
課題提起　「飼料メーカーから見た飼料用米普及のための課題」
昭和産業株式会社　飼料畜産部　担当　多田井　友揮　１０２
質疑応答　司会　信岡誠治　東京農業大学農学部畜産学科　教授〈農学博士〉
閉会挨拶　「これからの日本の食糧自給率の向上と水田の活用、瑞穂の国の持続を望んで」
一般社団法人日本飼料用米振興協会　副理事長　加藤　好一　１１２
（生活クラブ事業連合生活協同組合連合会　会長）
案内パンフレット　１１３
奥付　１１４


開　催：２０１７年（平成２９年）３月１７日（金）　開場　１０：３０～１７：００　閉場
会　場：東京大学　弥生講堂（一条ホール）・（３００名収容）

**主　催：一般社団法人　日本飼料用米振興協会**
**後　援：農林水産省**

# 開催ご案内

一般社団法人　日本飼料用米振興協会（j-fra）は、**「飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会　飼料用米多収日本一表彰式、飼料用米普及のためのンポジウム２０１７」**を開催します。

## 開催要領

開催日時：2017 年 3 月 17 日（金）
10 時 30 分開場、11 時～17 時にシンポジウムを開催します。
12 時～12 時 50 分の間、弥生講堂ロビーで資料展示、会議室で試食会を行う。
会　　場：東京大学弥生講堂（一条ホール・会議室）（286 名収容可能）。
東京都文京区弥生１－１－１　東大弥生キャンパス
参加費無料
ホームページ（http://www.j-fra.or.jp/）で参加者募集を行いました。

なお、展示・試食は昼休憩時間（12 時～12 時 50 分）を利用しますので、参加者は事前におにぎりやサンドイッチなどの軽食を用意しておいてほしいと主催者としては希望します。但し、ホールでは食事ができませんのでご承知おきください。
試食では飼料用米育ちの豚肉のしゃぶしゃぶ、ゆで卵、肉製品を用意しています。

## メインテーマ

飼料用米の 50 万トン弱の生産になったことを踏まえ、次の通りです。

**〈目的〉**
食料自給率の向上を目指し、耕（作）畜（産）消（費）の連携を実現しますことで、国産飼料用米による給餌を推進しますことにより、コメ育ちの畜産物（牛肉・牛乳・豚肉・鶏肉・鶏卵　およびその派生商品）のブランド化及びその流通、消費を促進しますための事例紹介を通じて、課題を明らかにして改善を図ることにより飼料用米の振興を目指す。

**〈概要〉**
日本飼料用米振興協会が主催している農業・畜産関連団体、流通事業者、流通・購入消費に関わる団体、個人及び研究者による普及交流集会「飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７」と、日本飼料用米振興協会及び農林水産省が共同実施している「飼料用米多収日本一表彰事業」を合同で開催実施します

**（経緯）**
本協会は、2008 年（平成 20 年）に穀物価格が高騰したいわゆる「畜産・大パニック！」の際に、国内の畜産農業を守り、食糧自給率の向上などを目的に開催された「学習会」を起点に組織された「超多収穫米普及連絡会」が原点。
その後、飼料用米の普及や、日本型循環畜産と農業、流通、消費の連携などを目指して活動してきた 7 年間の活動実績を踏まえて、2014 年（平成 26 年）4 月にさらなる推進のため、組織の一般社団法人化を実現した。
一昨年（2015 年 3 月 20 日）、法人化第 1 回（通算 8 回目）の「シンポジウム 2015」。
昨年（2016 年 3 月 11 日）、法人化第 2 回（通算 9 回目）の「シンポジウム 2016」。
今年（2017 年 3 月 17 日）、法人化第 3 回（通算 10 回目記念）「飼料用米多収日本一表彰、シンポジウム 2017」を開催します。

従来推進してきた「飼料用米の利点」（給与された家畜（鶏卵、鶏肉、牛肉、牛乳、豚肉製品の食味の改善など）の成果を強調し、普及促進をしてきましたが、国内外の様々な経済的変動、畜産・農業環境の大きな変化を背景に、食料自給率の向上が大きな課題となってきていることを受けて、食料自給率を巡る話題や特に米国における農産物に対する助成金の実態など国際的な農産物の安全保障上の問題点を掘り下げてきています。

**今年のシンポジウムの特徴点**
**（五部構成）**
今年、2016 年のシンポジウムの内容は、日本一表彰式との合同開催ということもあり、全体をシンポジウム三部と展示・試食会、表彰式の五部構成となっています。

**第一部**は、当協会の取り組みの紹介をテーマとしています。
**展示・試食会**
**第二部**は、基調講演として、農林水産省の報告を組みました。
第二部と第三部の間に次の表彰式を実施します。
**飼料用米多収日本一表彰式**
**第三部**では、飼料用米の普及事業の様々な事例や課題を紹介します。

**（内容紹介）**

**第一部**

シンポジウムでの展示をきっかけに、テントメーカーである太陽工業㈱と東京農業大学による籾米による簡易保管実験実証研究を２年間にわたり実施してきました。当協会はこの実験をサポートしてきました。今年のシンポジウムではこの実績を踏まえ、太陽工業㈱による報告をいたします。

日本飼料用米振興協会は、東京農業大学、全国農業協同組合連合会と「飼料用多収穫米の栽培に関する研究」契約を締結し、新品種「オオナリ」の栽培試験に取り組みました。今回のシンポジウムではこの成果を基に、東京農業大学の栽培面での低コスト研究についての報告をいたします。

**展示・試食会**

消費者組織であるパルシステム生活協同組連合会の食肉加工場である株式会社パル・ミートによる資料展示・しゃぶしゃぶの試食を用意しています。

東京農業大学による飼料用米を給与した鶏卵のゆで卵を試食していただきます。

東京農業大学による飼料用米に対する取組みの資料展示をいたします。

太陽工業株式会社の「屋外保管用防水フレキシブルコンテナ」などの資料展示を行います。

熊本県などと飼料用米のホールサイレージ研究開発を推進しているヤンマーアグリの設備等に関する資料展示をしてもらいます。

現在、更に展示資料、試食品を集約しています。

**第二部**

日本における食料自給力の向上を目指す立場から主食用米および飼料用米の生産から普及への政策について農林水産省政策統括官穀物課および生産局畜産部飼料課による推進政策を基調講演としてお願いしました。

**飼料用米多収日本一表彰式**（成果報告と表彰式）

昨年、一般社団法人日本飼料用米振興協会と農林水産省は、初めて全国の農業生産者を対象とした「飼料用米多収日本一表彰事業」を発足させました。

多収生産の日本一を競う公募に応募された農業従事者は448件ありました。その成果を今年１月末に集約し、審査委員会による厳正な審査を得て表彰事業者を選定します。

本事業の成果と表彰者の紹介、表彰式を実施します。表彰者のご挨拶を予定しています。

**第三部**

第三部では、主食用米から飼料用米までを生産し、畜産への給与を実施し、製品まで事業を展開している山口県の秋川牧園の特に保管給与のシステムについて特別報告をいただきます。

熊本県を中心として、ヤンマーアグリなどの研究開発集団を組織し、様々な研究を行っています。その中でも飼料用米のホールサイレージなどの利用促進を図る取り組みを紹介します。昨年に引き続き、より具体的な事業展開の可能性を報告していただきます。

消費者組織であるパルシステム生活協同組合連合会の食肉供給事業を通じ、料用米の実際の取り組みを報告していただきます。飼料用米給与の鶏肉や鶏卵の取り組みも併せて報告していただきます。

多くの飼料用米が収穫されるようになった前進面と同時に、実際に畜産事業者が利用する配合飼料を生産する事業者にとって、現在の飼料用米の流通は決して恵まれた環境にはないのが現状です。

生産者から飼料用米の生産予約、集約、物流、保管、配合作業などの飼料集約事業者（昭和産業株式会社）から見た改善すべき課題などを実際の業務関わっている立場から改善課題を提言していただきます。

以上の様々な研究や事業、消費に至る飼料用米の一貫した取り組みを様々な取り組みを理解していただく「集い」として企画しました。多くの消費者、主婦をはじめ、配合飼料メーカー、物流事業者、保管事業者、農業協同組合、農事法人、農家、研究者、学生などの方々が理解しやすい日本における水田のフル活用、飼料用米の利活用について皆様と考え、交流する場として運営いたします。

シンポジウム会場で講演・報告者の資料を配布します。事前作成のため、当日変更します部分が発生しますが、最終発表資料は、終了後、直ちに最終報告資料としてホームページでＰＤＦを掲示します。

**意見交流会、懇親会の開催**

シンポジウム終了後、東京大学消費生協の農学部食堂で希望者による交流懇親会を開催します。

17：30 から有料で 3,500 円。ホームページで事前募集していますが、当日の参加も受け付けますので、ご遠慮なくご相談ください。当日の受付でご希望を承ります。シンポジウム終了時にもご確認します。

なお、意見交流懇親会を積極的に取材していただきたいと、事務局では、出席者の生の声を聴いていただきたく、報道関係者の方のご参加を呼びかけます。

取材のため飲食等ができないということで、参加費無料としておりますので、参加者申込書に報道と記載いただければ幸いです。

## 飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７

| | | |
|---|---|---|
| 主　催 | ： | 一般社団法人　日本飼料用米振興協会 |
| 正 会 員 | ： | 生活クラブ事業連合生活協同組合連合会<br>全国農業協同組合連合会<br>木徳神糧株式会社<br>昭和産業株式会社<br>株式会社秋川牧園<br>シンジェンタ・ジャパン株式会社<br>中国工業株式会社<br>中野区消費者団体連絡会<br>ＮＰＯ未来舎 |
| 賛助会員 | ： | 日本生活協協同組合連合会<br>生活協同組合おかやまコープ<br>庄内みどり農業協同組合、<br>栃木県開拓農業協同組合<br>株式会社平田牧場<br>ＪＡ加美よつば農業協同組合、<br>滋賀県飼料米利活用推進協議会<br>太陽工業株式会社 |
| 協賛団体 | ： | 東都生活協同組合<br>株式会社パルミート |

## 飼料用米多収日本一表彰事業

| | | |
|---|---|---|
| 主　催 | ： | 一般社団法人日本飼料用米振興協会<br>農林水産省 |
| 後　援 | ： | 全国農業協同組合中央会（全中）<br>全国農業協同組合連合会（全農）<br>協同組合日本飼料工業会 |

# ご 挨 拶

２０１７年（平成29年）3月17日

一般社団法人　日本飼料用米振興協会

| | |
|---|---|
| 理事長 | 海老澤　惠子（中野区消費者団体連絡会） |
| 副理事長 | 加藤　好一（生活クラブ事業連合生活協同組合連合会） |
| 理　事 | 木村　友二郎（木徳神糧株式会社） |
| 理　事 | 遠藤　雄士（全国農業協同組合連合会） |
| 理　事 | 信岡　誠治（東京農業大学農学部） |
| 理　事 | 谷井　勇二（　　） |
| 理　事・事務局長 | 若狭　良治（NPO未来舎） |
| 監　事 | 岩野　千草（中野区消費者団体連絡会） |

一般社団法人日本飼料用米振興協会のシンポジウムにご参加いただきありがとうございます。

2007年の輸入飼料の国際的高騰による畜産パニックをきっかけに、生産者・消費者・学者が一堂に会して2008年に「畜産大パニック学習会」を開き、任意団体の「超多収穫米普及連絡会」としてスタートいたしました。以来、輸入のトウモロコシに頼らず、国産のお米を飼料として畜産を発展させようと、飼料用米普及のための活動を地道に続けてまいりました。

毎年シンポジウムを開催してきましたが、2014年4月に一般社団法人日本飼料用米振興協会として法人化し、その３回目、通算10回目のシンポジウムとなります。

回を重ねる中で、飼料用米をさらに普及させるにあたって、国の制度及び生産、流通、保管などについての課題が沢山あることがわかってきました。

日本飼料用米振興協会としては、いろいろな方面からの問題提起や情報交換のできる場となること、そして行政ではやれないこと、行政に要望すること、行政と協力してやっていくことなどを具体的な形にして実行できるよう、努めていく所存です。

さて、私どもの協会の取り組みとして新たに２つの取り組みを2016年度におこないました。

１つ目は、「飼料用米収量日本一表彰事業」です。農林水産省との共同事業として推進してきました。

これは、飼料用米をできるだけ低コストで多収穫できる生産を目指し、多収穫品種や構築連携で得られる有機肥料の使用促進とそのための農業従事者の生産技術や成果で優れた実績を上げた個人や組織を表彰し、その成果を広く紹介、普及をしようというものです。

今回初めての事業でしたが、全国から448の応募をいただき、すでに2016年度産飼料用米収量について審査も終えました。本日その表彰式もこの会場で行うことにいたしました。

二つ目は、全国農業協同組合（全農）と東京農業大学（農学部畜産学科）と当協会の三者による「飼料用米試験栽培委託契約」です。これにより、東京農業大学の信岡誠治教授の指導の下、東京農業大学の学生さんや協会事務局などで手植えの実習を含めて、汗をかきながらの「多収品種のオオナリを試験栽培」を実施しました。この成果についても本日の報告で一部報告させていただきます。

わが国の米政策をめぐっては、来年2018年（平成30年）に米の生産調整いわゆる減反政策が廃止されることになり、今後の動向がどうなるのかとても関心の高い所です。飼料用米についても、日本の食料問題・米政策全体の中で考えていく必要があり、今一度、食糧自給率向上と水田・国土の保全という基本理念に帰りながら、今後の方向性と課題を明らかにして参りたいと思います。

本日のシンポジウムが活動を前進させるために大いに意義あるものとなるよう期待しております。

# 連帯のご挨拶

**日本生活協同組合連合会**

総合運営本部　部長　小熊　竹彦

日頃より全国の生協が、事業や地域の諸活動において、大変お世話になっております。

この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。

シンポジウムの開会にあたり、一言、連帯のご挨拶を申し上げます。

一般社団法人飼料用米振興協会は、2007 年の世界的な穀物相場の高騰の中、畜産事業者の経営改善を図ることを目的として、多収量米、とりわけ飼料用米の普及活動を進めてこられました。現在、世界の状況をみれば、アメリカ大統領選挙の結果やイギリスの EU からの離脱など、世界的なナショナリズムの台頭をはじめ、中東での紛争と難民の増加、中国経済の停滞など、国際情勢の不安定化が進んでおり、世界的に政治・経済の先行きが見通せなくなっています。

こうした時代において、改めて国内における農業の大切さを共有し、生産力の向上に向けた取り組みを進めていくことが求められています。また、飼料用米の取り組みは、国内の生産力の向上だけでなく、地域を維持していくための重要な取り組みであると受け止めています。

一度放棄してしまった農地を再び戻すことは容易ではなく、地域の環境保全や景観維持、生物多様性の保全など、多面的な機能を維持し、地域社会に重要な役割を果たしていくためにも取り組む価値を強く感じています。

政府においても昨年の 11 月に、「農林水産業・地域の活力創造本部」において、「農業競争力強化プログラム」が決定され、取り組む課題の中に飼料用米の推進が位置付けられ、その取り組む意義もさらに重要性を増しています。

全国の生協は、飼料用米の取り組みを含む産直事業を生協事業の重要な柱として位置づけ、取り組みを進めてきました。この間の飼料用米の給餌数量は、全国で着実に増加を続けています。

飼料用米を使った商品は、生協の組合員にも大変好評をいただいているところであり、昨年は飼料用米で育った牛肉を取り扱いを始めた生協もあるなど、その取り組みはさらに広がっています。

また、地域の農業は、消費者の「交流」「学び」「体験」の大切な場となっています。農業から遠く離れてくらしている都市部の消費者にとっても、自然の豊かさを感じ、農業や生き物の大切さを理解するなど、「食と農」をつなぐ取り組みは、豊かなくらしの実現に大きく寄与しています。

地域とともにある生協は、今後も飼料用米の生産量の確保、作付面積の確保、販路の拡大、コストの削減、組合員の認知度の向上などの取り組みを通じて、飼料用米をさらに推進してまいりたいと思います。

飼料用米をはじめとした地域社会づくりの取り組みが、地域の人々のくらしをより豊かにし、そして日本の農業を強めていくことを誓い合って、ご挨拶とさせていただきます。

# 閉会の挨拶

一般社団法人　日本飼料用米振興協会
副理事長　　加藤好一
（生活クラブ事業連合生活協同組合連合会・会長）

## 飼料用米生産と利用普及をさらに促進してまいりましょう

本日は、一般社団法人日本飼料用米振興協会の「シンポジウム２０１７」にご参加いただき誠にありがとうございました。

さて、この「飼料用米普及のためのこのシンポジウム」も、通算第10回目という節目を迎えました。

この間、当協会とこのシンポジウムをご支援いただいた、多くの皆様方にまずは感謝申し上げます。

一昨年、昨年と、飼料用米が大いに躍進し、大増産となりました。

このこと自体は極めて喜ばしいことと考えておりますが、とりまく情勢は厳しく、生産者は先行き不透明な不安を抱えていることも事実です。

私どもは、主食用米生産の経営が成り立ってこその飼料用米生産ということを長年に渡り主張をしてまいりました。しかし、依然として、現在も様々な不安を抱えているのが現実だと考えます。

主食用米の消費量も毎年８万トンという大きなペースで確実に減ってきています。

生産現場の高齢化も早く進行しています。

さらに、ＴＰＰ（環太平洋連携協定）という大津波が襲ってくるかと身構えてきましたが、アメリカ大統領選挙のトランプ大統領の実現ということで、ＴＰＰは一瞬にして消えてしまいましたが、その代わりにそれまでのＴＰＰで譲歩を重ねてきたことをベースに、ＦＴＡという二国間協定で一層徹底的に不利な譲歩を求められるとの観測が強くなっています。

そのような状況の中ですが、狭い国土を活かし、連作障害のない水田による米つくりによる飼料用米生産は未来に向けた力強い希望であり財産です。

減反政策の終焉とともに、この稲作が日本の農作の中で本作化し、飼料用米が配合飼料原料の主原料になる時代を早く作っていかなければなりません。

① 生産者の希望は、飼料用米の安定的な生産環境の保障です。助成制度に永遠不滅ということはありませんが、同時に、農産物に助成金を出して国産農業を支援するのは諸外国では当たり前のことです。日本の農業が、そのような環境の中で、何の保証もない中で維持できることではありません。世界の状況を学び、自立を促し、継続性のある農業、畜産を支える法制化などの努力が最重要な課題だと考えます。

② 農林水産省は飼料用米を１１０万㌧まで増産していくという大きな方針を持っています。
現在の倍の生産量となります。
そうなると、現在でさえ、様々な問題が山積しています。
生産、集荷、保管、流通・利用、製品の消費普及などの課題が噴出してくることは容易に予想できます。
当然、施設などの設備投資が必要となるはずですが、そうなると飼料用米の助成を含めた永続性が担保されなくてはどうにもなりません。保管問題を積極的に追求していくことが必要です。
飼料用米を飼料原料として確実に定着させていくためには、畜産生産者がこれを確実に飼料とすることが欠かせません。このような仕組みやそれに見合う保証なども検討することが重要となるでしょう。

③ 飼料用米の多収化努力を一層推進しましょう！
全国各地に様々な努力がつみあがっています。
こうした各地のチャレンジの情報を集約し、優良なチャレンジについて紹介し、共有しましょう。

どれも大きな課題です。日本飼料用米振興協会だけでどうにかなるものでもありません。

全国の関係者のみなさんのご支援・ご協力をたまわりながら、ぜひとも飼料用米生産の定着・振興に向けてともにがんばってまいりましょう。

２０１７年3月１７日

法人化第３回（通算１０回目）飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会

# 飼料用米多収日本一表彰式・
# 飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７

飼料用米多収日本一表彰式・
飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７

**開　場　１０：３０～**

総合司会　若狭　良治（理事・事務局長）

**第一部　シンポジウム　開会１１：００～１２：００（敬称略）**

主催者挨拶　一般社団法人日本飼料用米振興協会　理事長　海老澤　恵子
連帯の挨拶　日本生活協同組合連合会　総合運営本部　政策企画部長　小熊　竹彦
活動報告　「飼料用米における生産コスト低減技術の研究について」
東京農業大学農学部　助教〈農学博士〉　有澤　岳
事例報告　「飼料用米の保管手段の低コスト化研究報告」
太陽工業株式会社・物流システムカンパニーマーケッティング室　室長　西村　哲

● 展示、試食、休憩（各自自由行動）　１２：００～１２：５０

**第二部　シンポジウム　開会　１２：５５～１３：４０**

基調講演　「水田のフル活用（仮題）」
農林水産省政策統括官穀物課　課長　川合　豊彦
基調講演　「飼料用米の利用推進について（仮題）」
農林水産省生産局畜産部飼料課　課長　富田　育稔

◆ 休憩・会場設営　１３：４０～１３：５５

**飼料用米多収日本一表彰事業　報告と表彰式　１３：５５～１４：５０**　この時間帯は農林水産省との共同開催です。

挨　拶　一般社団法人日本飼料用米振興協会　理事長　海老澤　恵子
挨　拶　農林水産副大臣　磯崎　洋輔
表　彰　農林水産大臣賞、政策統括官賞、全国農業協同組合中央会会長賞、全国農業協同組合連合会会長賞、協同組合日本飼料工業会会長賞、日本農業新聞賞　各組織より授与いたします。
受賞者　挨拶　有限会社　平柳カントリー農産　代表取締役　我孫子　弘美

◆ 休憩・会場設営　１４：５０～１５：００

**第三部　シンポジウム　１５：００～１７：００**

特別講演　「飼料用米の生産から畜産への給与、製品の出荷作業」
株式会社秋川牧園　会長　秋川　実
活動報告　「生協における飼料用米利用畜産物の供給活動」
株式会社パル・ミート（パルシステム生活協同組合連合会）取締役商品本部長　江川　淳
研究報告　「飼料用米を利用したＳＧＳ生産と活用事例」
熊本県農業研究センター　畜産研究所　飼料研究室　室長　鶴田　勉
課題提起　「飼料メーカーから見た飼料用米普及のための課題」
昭和産業株式会社　飼料畜産部　担当　多田井　友揮
質疑応答　司会　信岡誠治　東京農業大学農学部畜産学科　教授〈農学博士〉
閉会挨拶　「これからの日本の食糧自給率の向上と水田の活用、瑞穂の国の持続を望んで」
一般社団法人日本飼料用米振興協会　副理事長　加藤　好一
（生活クラブ事業連合生活協同組合連合会　会長）

**開　催：２０１７年（平成２９年）３月１７日（金）**
**開場　１０：３０～１７：００　閉場**
**会　場：東京大学　弥生講堂（一条ホール）・（３００名収容）**
**（交通アクセス　地下鉄南北線・東大前）**

**主　催　：　一般社団法人　日本飼料用米振興協会**
**後　援　：　農林水産省**

MEMO

法人化第３回　（通算第１０回記念 Since 2007）

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会

# 飼料用米多収日本一表彰式、
# 飼料用米普及のためのンポジウム　２０１７
# 資　料　集

書　　名　2017 年 3 月 17 日　東京大学　弥生講堂（一条ホール）　交流集会　最終資料
発行責任　一般社団法人　日本飼料用米振興協会　　〒164-0013　東京都中野区１－１７－３
http://www.j-fra.or.jp/　postmaster@j-fra.or.jp　TEL・FAX　03－3373－8119
構成編集　理事・事務局長　若狭良治 ＜　wakasa_ryoji@j-fra.or.jp　070-3522-3151　＞

非売品　　余部は基本的にございません。
ホームページ　＜http://www.j-fra.or.jp/　＞　に報告書、最終資料（当日発表）を掲載します。